

ジャイルズ・コンスタブル著／高山博監訳
小澤実・凶師宣忠・橋川裕之・村上司樹訳

『十二世紀宗教改革』

——修道制の刷新と西洋中世社会——

慶應義塾大学出版会 二〇一四・六刊

A5 七一二頁 九〇〇〇円

挑発的にも見えるこのタイトルは、有名なハスキンスの『十二世紀ルネサンス』のコンセプトにたつたものであることを本書の冒頭で著者は明言する。そして一般的に十六世紀と結び付けられる「宗教改革」というタームを十二世紀に適用し、十二世紀の宗教的な姿勢や宗教制度上の変化すなわち改革という語をルネサンスに近いニュアンスで用いるのは誤りでないと述べる。著者は十一世紀後半から十二世紀後半の時代枠の中で活動した多様な修道院諸会派、すなわち伝統的なクリューニ修道院、シトーやシャルトルーズやグランモンなど改革派修道会、ロベール・ダルブリッセルなど遍歴説教者、プレモントレなど律修参事会、さらに隠修士や騎士修道会などについて、さまざまな史料(規則、聖人伝、死者記念関連、書簡、論考)などをもとに実証的に考察し、彼らの生活や理想を再現する。そして諸会派の運動は多様でありながら互いに対立するものではなく、この時代はキリスト教史の分水嶺であるが、よく使われる「修道制(院)危機」というタームでは正確に

表現できないと述べる。

第一章の「導入」につづき、第二章「さまざまな改革者」ではこの時期に活動した修道院諸会派について、新旧の対比や改革派のあいだでの差異を前提に考えるのではなく、これらを同じ土壌で把握し、その相似性や平行現象に注目する。第三章「改革の類型とその条件」では、改革修道院の形態が多様化し、修道士の数が増加したこと、いっぽう旧修道院がなお健在であったことを個別修道院の事例や統計数字を用いながら示す。これまでの研究が個別の修道院や会派ごとに分かれていたことの弊害を指摘し、大きな均一性と伝統的な解決策へとむかう共通性が存在していたと述べる。第四章「改革のレトリック」では改革派の希望や理想や自己認識を論じ、史料で理想を記した文言(他会派の批判やベネディクト戒律の遵守)を額面通り受け取ることが憂慮する。第五章「改革の現実 1—共同体内の変動」と第六章「改革の現実 2—修道活動と世俗社会」では、第四章で論じた改革派の理想が修道院の中と社会でどのように実行されたかを語る。騎士修道士や助修士など新しい制度が現れたいっぽう、慣習律・死者記念帳・典札史料の研究から改革派の修道院生活も伝統の枠内にあり、自らの肉体労働のみで完全に自給できた修道院はほとんどなかったとする。第七章「改革の霊性」では、自責の感覚が立ち現れるいっぽうでとりなしの祈禱が次第に価値を失い、贖罪と救済のプロセスが死と最後の審判のあいだも続くと考えられ、十二世紀後半に煉獄の観念が誕生し、孤独の感覚が霊性に緊急性という要素を課したと述べる。中世末期の霊性とされるキリストの人性や受難の重視と模倣、

個人的な悔悛などがこの時代に始まっていたことを示す。第八章「十二世紀社会のなかで」は十二世紀改革を修道制と修道生活の歴史における画期であると同時に、教会史・キリスト教社会史の分水嶺であったと述べ、広い時代的な位置づけを試みる。ルターがクレルヴオーのベルナルに共鳴し、イグナティウス・ロヨラの『靈操』が十二世紀の靈性に依拠している例などを挙げながら、十二世紀宗教改革が十六世紀宗教改革に連なっていたことを示す。

本書はノウルズ、ルクレール、ハリンガーなどの修道院研究の先達たちへのオマージュであるとともに、クリュニーの尊者ピエールの書簡の校訂版の刊行にさかのぼる著者の研究の集大成であり、典礼史料や死者記念史料の分析によりさらなる研究の深化を期待する著者の後世への強いメッセージをこめた豊かな百科全書ともいえる。

(杉崎泰一郎)